

鶴の湯

由緒正しき温泉の誕生物語

歴史ある温泉には大抵、誕生にまつわる物語が伝わっています。その多くに、温泉に浸かって奇跡的に怪我が治った手負いの動物が登場します。鶴の湯の物語はそのさらに上に行く、動物と 17 世紀に実在した歴史上の人物が組み合わさったものです。

昔々、ある裕福な老人が病に倒れ、財を失っていきました。その息子が父親に食べさせるための山菜を採りに出かけたとき、一羽の鶴が傷の手当をしている温泉にたどり着きました。その温泉の効能に感心した息子が父親をそこに連れて行くと、父親の病はすぐに治癒しました。温泉の存在は地元の人々にも知られるところとなり、皆が利用するようになりました。しかし、その後ある悪い老人がその温泉は自分だけのものだと言って人々を追い返しました。そこで、地元の領主が介入し、その自分勝手な老人に、この温泉は彼の私有物ではなく皆のものだと告げました。その温泉は「鶴の湯」と呼ばれるようになりました。

この伝説の史実には、佐竹氏が関わっています。初代将軍・徳川家康は、関ヶ原の戦い（1600）で徳川に積極的に味方しなかった罰として、佐竹義宣（1570-1633）から現在の茨城県にあった広大な領地を剥奪し、秋田の小さな領地へと転封しました。義宣の養子、佐竹義武（1609-1672）は痛風を患っていました。義武が近隣の南部氏の者に痛風に効く温泉はないかと尋ねると、彼自身

の領地にある温泉が一番良いと教えられました。1638 年、田沢湖を船で渡り、鶴の湯に向かった義武（伝説に登場する領主とされる）は、この温泉により行きやすくするために街道の整備を命じました。民話を裏付けるように、記録には 17 世紀末に鶴の湯が庶民を受け入れ始めたことが確かに記されています。

鶴の湯に、大名や公家、幕臣のための本陣（現在の新本陣）と、少し身分の低い旅人のための脇本陣（現在の本陣）という二つの宿があったのは、こうした貴族に関係する成り立ちに由来しています。滞在においてより雰囲気を楽しめるのは現在の本陣（茅葺きで黒っぽい木造の平屋）で、設備がより豪華なのは新本陣です。